

明治期における「良妻賢母」論と  
国家主義的女子教育思想の形成と展開

——中村正直「善良なる母」（1875年）から  
下田歌子『婦人常識の養成』（1910年）まで——  
（要約）

広島大学大学院文学研究科  
博士課程後期人文学専攻  
学生番号：D146252  
氏名：郭 妍琦

本論文では、明治期日本の「良妻賢母」論および女子教育思想の形成と展開を明らかにするために、「良妻賢母」思想を明確に言説化した一人である下田歌子を取り上げる。一方、下田の国家主義的な「良妻賢母」主義が明治啓蒙主義の女性像や女子教育論からどのように変容し展開したかを明らかにするために、明治啓蒙家の代表人物である中村正直の著作も取り上げて論じる。

第一章では、「良妻賢母」という女性像、及び正直と歌子に注目する意義を述べ、先行研究を批判的に検討し、研究対象と課題を明確にする。「良妻賢母」は日中両国において近代の最も早い時期に、ともに伝統を打破する新しい女性像として提起され、日本では近代女子教育理念の主流となった。この像を「良妻賢母主義」として初めて明確化したのは下田歌子である。しかし先行研究は歌子の女子教育事業の展開について通時的に議論するものが多く、歌子の教育思想がどのように国家主義と結びついたのか、歌子の個人的な経験がどのように彼女の女子教育及び「良妻賢母」思想に影響を与えたのかといった点については十分議論されていない。

第二章では、議論の背景となる事項を説明する。近代の「良妻賢母」像がどのように新しさを持っていたかを理解するために、近世において家庭内で重要な働きを担った「妻」、「母」、「嫁」の役割を検討する。次に、本論文が扱う明治期の「良妻賢母」主義と女子教育を歴史的に位置づけるために、幕末から明治末期までに女子教育がどのように展開したかを整理する。また、「良妻賢母」思想は、国家と家族を接合させる家族国家観と密接に関連していたため、このような家族国家観とその天皇との関係に関する先行研究の議論を整理する。

第三章では、中村正直の「良妻賢母」思想と女子教育観を明らかにするために、まず中村の経歴とその時代背景を説明し、それから彼の「良妻」像と「賢母」像を論じる。その上で、「良妻賢母」思想を実践するために中村が創立した女学校の科目内容等から彼の女子教育観を検討する。

第四章においては、下田歌子の「国のため」の女子教育観を明らかにするために、彼女の経歴とその時代背景を説明し、それから欧米留学までの下田が自ら創立した桃夭学校、及び開設準備と経営を任された華族女学校との二校の教育実践を検討して、彼女の国のための女子教育観を明らかにする。

第五章では、下田の欧米留学経験及び彼女が考えた女性と国家の関係を明らかにするために、下田の欧米留学中の経験を紹介し、そこから「中下流」女子-下田の述べる大衆女子-教育の重要性を認識するに至った過程を分析する。さらに、下田がどのような国家のあり方を構想していたかを検討して、下田が考えた女性と国家との関係を分析する。

第六章では、下田が異なる階層の女性に異なる役割を求めた女性観と、それに基づいて推進した大衆女子教育を取り上げる。自ら創立した帝国婦人協会の設立主意書と、大衆女子教育の実践のために創立した実践女学校・女子工芸学校における教育を取り上げて、彼女の「良妻賢母」思想の変容と階層的な女性観の性格を検討する。

第七章では、1904-06年頃に女子教育に向けられた批判に対する下田の反応を検討し、そこから見えて来る下田の女性の職業に対する考えを検討する。さらに、下田が1910年頃から主張した「国民教育」を取り上げ、これを通じて下田が「良妻賢母」思想を国民育成・人格育成と結びつけたことを明らかにする。

終章では、本論文の議論を要約し、明治初期には啓蒙主義的傾向が強かった「良妻賢母」思想と女子教育が、次第に国家主義的なものに変容したことを結論づける。